

第2章 千代の子どもを、千代で育てる

- 社会福祉法人 千代しゃくなげの会 千代保育園・千栄分園 -

はじめに

昨今、地域住民と保育園児との交流活動を行うなど、保育園を地域に開く動きがみられる。実際、2000年から実施された「特別保育事業」には、「世代間交流事業」や「異年齢児交流等事業」が取り入れられている。「老人福祉施設・介護保険施設等への訪問、あるいはこれら施設や地域のお年寄りを招待し、劇、季節的行事、手作り玩具製作、伝承遊び等」（全国保育園団体連絡会・保育研究所編 144-145頁）を行う活動や「保育所を退所した児童や地域の児童とともに地域的行事、ハイキング等の共同活動」（前掲 145頁）を通じて、保育園の入園児と、地域に住むお年寄りや子ども達とのふれあいが促されているのである。また、今挙げたような「交流」ととどまらず、地域住民が伝承遊びや畑作り等を教える講師として保育活動に協力するといった取り組みもなされるようになっていく。保育園は、かつてのような職員と園児だけの場ではなく、地域住民を巻き込んだ活動の場となっているのである。

こうした状況のなかで、長野県飯田市の千代地区において、地域住民と保育園との新たな関わり方を示す取り組みが始められた。地区の住民が一戸1万円ずつ寄付をして社会福祉法人を設立し、保育園の運営を開始したのである。千代地区の住民は、保育園児との交流や外部の講師としての協力はもちろんのこと、保育園そのものの支え手となっているのである。

それでは、住民による保育園の運営が行われるようになった千代地区とは、どのような地域なのであろうか。また、千代地区の保育園では、どのような活動が行われているのであろうか。ここではまず、地区の概要を踏まえた後に、「社会福祉法人 千代しゃくなげの会（以下、「しゃくなげの会」と表記）」の設立の経緯と活動の実際をみていくことにする。なお、以下では、2006年12月13日に行った、「しゃくなげの会」理事長兼千代保育園園長の北澤先生、副園長の松島先生、ならびに「しゃくなげの会」が運営しているつどいの広場「くまさんのおうち」のアドバイザーである清水先生に対するインタビュー調査の結果を用いていく。また、参考資料として、法人の設立経緯が記されたパンフレットならびにインタビュー調査の前に行ったアンケートの結果を利用する。

1. 千代地区の特徴と千代保育園設立の経緯

(1) 千代地区の特徴と千代保育園・千栄保育園の誕生



千代しゃくなげの会千代保育園
 住所 飯田市千代932-5
 電話 (FAX) 0265-59-2144

【保育目標】
 ☆ あいさつができる子ども。
 ☆ 自分の思っていること、考えていることを言葉に表現できる子ども。
 ☆ 思いやりの気持ちを持ち、友だちと元気に遊ぶ子ども。
 ☆ 自然の中で、のびのびとあそび、心身共にたくましい子ども

【保育方針】
 ○丈夫な体づくり・・・散歩や戸外あそび、稽古運動プログラムあそび
 ○豊かな自然の中で、食育や身体験を通じた活動を通し、健やかな子どもの育ちを保障する。
 ・ 散歩や畑づくり、よこね田んぼの田植えや稲刈りなど、様々な体験を友だちや、地域の方々と一緒にしています。
 ○地域交流を通じて、人間性豊かな育ちを願って・・・
 ① 未就園児交流・園開放・老人交流などを行っています。
 ○地球に優しい環境教育を、こみの分別や畑、花壇づくりを通して行う。
 一人ひとりの個性を大切にしたい保育をします

【保育内容】
 1 保育時間

	月～金曜日	土曜日	有・無
平常保育時間	8:00～16:00	8:00～12:00	有
早朝保育時間	7:30～8:00	7:30～8:00	有
長時間保育	16:00～18:00		有
延長保育時間	18:00～19:00		有

★学童保育 16:00～19:00

2 一日の生活

8:00	開園
8:30	登園・朝のしたく
10:00	活動・あそび
11:30	朝食
13:00	昼寝・休憩
14:30	昼食・あそび
15:00	おやつ

千代地区は、飯田市を流れる天竜川沿いの山間部にある自然に恵まれた地域である。段丘地帯では棚田や畑が作られ、果樹園も散在している。人口は約2,000人、世帯数は約600戸（2005年10月1日時点）であり、そのうち、0～14歳の年少人口は約12%を占めている。地域内には、独居老人も多く、高齢化が進みつつある地域といえる。各世帯の構成は3世代家族が基本的であり、なかには、母親が離婚して実家に戻り、祖父母と共に子育てを行っている家庭もある。



また、この千代地区は旧村の区切りをもとに、さらに「千代（旧千代村）」と「千栄（旧千栄村）」（以下、現在の千代地区との混同を避けるため、旧千代村地区を「千代」、旧千栄村地区を「千栄」と表記する）という2つの地区に分かれており、「千代」と「千栄」の人口比は、ほぼ6対4の割合となっている。この「千代」「千栄」両地区には小学校と保育園が1ヶ所ずつある。保育園の対象年齢は、両園ともに3歳～就学前の幼児であり、2006年度の在園児数は、「千代」が32名、「千栄」が11名である。

ここで、簡単に千代地区の保育園の歴史を振り返ってみよう。「千代」「千栄」地区に保育園が設立されたのは今から40年ほど前のことである。「千代」に保育園が開園したのは1964年であり、民家を改造した建物を使った無認可保育施設としてのスタートであった。その後、地域住民が自治体へ要求した結果、1971年から公立保育園として認可されている。また、「千栄」の保育園も、1963年に民家を改修した無認可保育園として生まれ、その後、地区が保育園の建物・敷地を買い上げて飯田市へ寄付し、1968年に公立の千栄保育園として認可されたという経緯をもっている。このように、「千代」「千栄」地区の保育園は共に、住民の必要や思いから生まれ、その後、住民による市に対する働きかけを経て、公立園として認可化されたのであった。

（2）保育園の民営化と「しゃくなげの会」の設立

行政によって運営されるようになった千代保育園・千栄保育園に大きな変化の波が襲ったのは、2003年のことである。2002年度・2003年度と2年連続して千栄保育園の園児数が10人を下回ったため、国・県からの補助金が打ち切られてしまったのである。こうした状況のなかで、2003年12月、飯田市は千栄保育園の存続について、千代地区の自治会に次の2つの選択肢を提示した。それが「千栄保育園を廃園して千代保育園に統合するか」もしくは「千栄保育園を千代保育園の分園として民営化するか」である。この提案をきっかけに、約2年間にわたる保育園をめぐる検討が始まったのであった。

民営化の提案と住民達の思い

市からの提案を検討するため、千代地区では、2004年5月に、保育園・小学校の保護者や自治会役員等の団体関係者17名による「千代地区保育問題特別委員会（以下、「特別委員会」と表記）」を立ち上げた¹⁾。千栄保育園の存続に関する検討を、千代地区全体の問題として、検討し始めたのである。

当時、千代地区の住民の間には、「千代保育園だけになった場合、卒園後は2校（千代小学

校・千栄小学校)に分かれて通学するのはかわいそう」という思いがあり、できる限り千栄保育園を廃園せず、2つの園を残したいという希望が出されていた。しかし、千栄保育園の運営を委託しようにも、園児の増加が見込めない千代地区では、運営を引き受けてくれる団体が現れなかった。そこで市は、千代地区の状況を考慮し、次のような提案をした。それが、「地域住民で社会福祉法人を設立して、千代・千栄保育園の運営を担う」という方法だったのである。この市からの提案は、「特別委員会」における話し合いはもちろんのこと、自治会や千代・千栄保育園の保護者会においても、議論を巻き起こした。例えば、「特別委員会」では、市内の保育園の視察や保護者会の意向調査などを行って保育園のあり方を検討すると共に、社会福祉法人の設立に必要な費用(1000万円)の調達方法など法人設立の可能性について話し合いがもたれた。また、自治会も、毎回の定例会で保育園のあり方に関する検討を行い、その内容をまとめた説明資料を全戸に配布するなどして、住民の理解を求めていった。

こういった検討が行われるなかでも、特に保育園に子どもを通わせる保護者達は、千代地区の保育園のあり方について、くり返し議論の場を設け、住民による法人設立について話し合いを進めていった。副園長の松島先生は、当時の様子について、次のように語っている。

委託はもう考えられないとなれば、もう、とにかくこちらの千代(保育園)の方の保護者も、(千栄保育園の保護者も、)どちらの身になっても、それは泣く泣くですけどね。地元の保育園を残したいという気持ちは誰もが理解できる。とすれば、後の生き残るのは、誰も作ってくれるわけではなければ、自分達で法人を作らなければ・・・。

ここで話されているように、保育園の保護者達にとって、「自分達で法人を作」という方法は、「委託はもう考えられない」状況で、まさに「泣く泣く」採用されたものであったのであった。こうして保護者の間では、法人設立という方法が選択されていったのであった。

その一方、保育園と直接かかわりのない住民達、とくに、保育園の存続が決まっている「千代」の住民にとって、千栄保育園の廃園・民営化問題は、当初、自分達の問題として捉えられていなかった。しかし、その後、住民同士の話し合いを重ねるうちに、「千代」の人達も、「千代」「千栄」という旧村の区切りを越えて、千代地区全体の子ども達の育ちという視点をもったのであった。当時の状況について、北澤先生は次のように語っている。

昔を辿っていけば、これは村が違いましたがね。千代村、千栄村あったんですが。それが今、「千代」と「千栄」を含めて千代(地区)とっている。それで、千代(地区)の子ども達、「千代」も「千栄」も一緒じゃないかっていう、そういう考えにね、地域の人はそういう考えになって、それじゃ、立ち上げましょうということになったんです。

このようにして、千栄保育園存続に関わる問題は、保護者や保育園関係者を超えて、千代地区全体の問題として捉えられるようになっていったのである。

法人設立への取り組み

千栄保育園の問題は、徐々に千代地区全体の問題として捉えられるようになりつつあったが、それでもなお、住民の間では、法人設立や保育園運営に対する不安は拭いきれなかった。というのも、地区住民による社会福祉法人の設立と保育園の運営は、長野県内でも前例がなく、法

人の経営や園運営についての見通しが持ちづらかったためである。なかでも、住民達が特に不安を感じていたのは、次の2点であった。1つは、経営が成り立つかという心配であり、もう1つは、保育士が変わることによる保育の質の低下である。

こうした不安を解消するため、住民達は市との交渉を行った。まず、1つめの経営問題については、飯田市から、保育料は一旦市に収めて、そこから運営費が支給されるという認可保育園のシステムについての説明があり、採算が取れることが明らかとなった。また、2つめの懸案事項である保育士の交代については、「しゃくなげの会」と飯田市が次のような協定を結んだ²⁾。その協定とは、移管後も、保育園の運営が軌道に乗るまでは、これまでの公立保育園の保育士を派遣するという形で残すというものである。この協定によって、引き続き公立保育園の保育士が子ども達の保育にあたることが保証され、住民達の不安も払拭されたのであった。

このようにして地区住民間の議論や行政との交渉を積み重ねた結果、2005年11月、千代地区自治協議会は、住民らの寄付で社会福祉法人「しゃくなげの会」を設立し、千代保育園の運営を開始するに至った。なお、法人設立のための資金(1000万円)は、千代地区約600戸による一戸1万円ずつの負担と篤志家の寄付によってまかなわれた³⁾。「千代地区の子どもは千代の皆で育てよう」という地域住民の気持ちが形となり、ここに、千代地区の花の名がつけられた社会福祉法人「しゃくなげの会」が誕生したのである。

2. 「しゃくなげの会」による子育て支援活動

「しゃくなげの会」では、「保育園が地域の子育て支援の核となる」ことを大切にし、千代地区に住む未就園児の親子や働く保護者に対して、積極的な子育て支援活動を行っている。具体的には、就園前の子どもとその親を対象とした「つどいの広場」等の事業を実施したり、保護者が働きやすいよう、長時間保育や学童保育にも取り組んだりしている。ここでは、それぞれの活動の実際をみていくことにしよう。

(1) 未就園児の親子に対する活動 未就園児交流・つどいの広場

就園前の子どもとその親に対する活動は、大きく分けて2つある。1つは、保育園で行っている「未就園児交流」であり、もう1つは飯田市の受託事業である「つどいの広場」である。

まず1つめの「未就園児交流」とは、未就園児の親子を保育園へ招き、親子で遊んだり、園児との交流を行ったりする活動である。これは、保育園が主体となって、年間8回程度開催しており、千代保育園では「ひよこの会」、千栄分園は「へっちゃんらぼんちの会」という名前がついている。なかでも、お話を伺った千代保育園の「ひよこの会」は、20年近く前から行っており、活動内容としては、夏祭りや運動会といった行事への招待や芋堀り等を行っている。保育園という場を生かし、園児とのかかわりを大事にした活動を展開しているのである。

また、2つめの活動は、つどいの広場「くまさんのうち」の開催である。開催日は、毎週水曜・金曜の10~14時で、会場は、千代保育園の向かいにある、千代ヤングサロンハウスである⁴⁾。基本的にプログラムはなく、親子で自由に遊ぶ場となっている。



写真：「くまさんのうち」の会場

11時半からはお昼の時間になっており、昼食を持ち込んで会場で食べることもできる。また、月に1回程度は、お楽しみ会や看護師・歯科衛生士を招いた講演会も開催している。

「くまさんのうち」には、一日に平均8～10組くらいの親子が来ており、利用者の8～9割は千代地区の住民である。千代地区で子育てをしている母親は、家庭では舅や姑の目を気にして、なかなかリラックスできない状況にあるが、そうした母親にとって、「くまさんのうち」は、ほっと一息つける場となっているようである。

このように、「しゃくなげの会」では、未就園の親子に対する2つの支援の場を設けている。これらの場を利用する母親達も、自分の都合や希望に合わせて、支援を利用するようになっており、どちらの活動も好評を博している。複数の支援の場を設けることは、保護者の選択の幅を広げ、母親達の子育てへの負担感の減少につながっているといえよう。

（2）保護者が働きやすい環境作り 未満児保育・延長保育・学童保育の実施

調査の事前アンケートにあるように、「しゃくなげの会」が重視していることの1つに、「働く保護者にとっても働きやすい環境づくり」がある。こうした環境づくりの取り組みは、特に保育園の活動のなかにみられる。

例えば、千代保育園では、朝は7時半から、夕方は16～19時まで延長保育を実施しており、千栄分園の園児も受け入れている。また、2007年度からは、1・2歳児にも保育対象を拡大し、未満児保育の実施も予定している。さらに、2005年4月からは、千代保育園において、小学校低学年児童を放課後に預かる学童保育を実施している。子ども達は、放課後になると、「ただいまー」という声と共に保育園に帰り、ほふく室で宿題を済ませた後、保育園の長時間保育の子ども達と共に、晴れの日には外で、雨の日にはリズム室で遊ぶ。学童保育は、異年齢の子ども達と共に、保育園の施設や園庭を使い、のびのびと遊ぶ機会となっているのである。



写真：千代保育園の園庭

こうした未満児保育や学童保育は、千代保育園の民営化の検討の際に、保護者から出された要望をもとに実施している。保護者のニーズに応える形で、活動が進められているのである。

これらのさまざまな支援について、松島先生は次のように語っている。

これだけ整備されてきてっていうか、一応、0歳は来年できないんですけどね、1・2歳を受けて、長時間保育19時までやって、朝も7時半から受け入れて、学童もあってっていうとね、大分、働くお母さん達にはね、整備されてきた感じでね。

保育園における長時間保育・未満児保育・学童保育の実施を通じて、松島先生は、保護者が働きやすい環境づくりが「整備されてきた」と感じている。保護者のニーズを受けて実現されてきた就労支援は、「しゃくなげの会」にとって、重要な活動として位置づけられているようである。

このように、「しゃくなげの会」では、未就園の親子や働く保護者等、千代地区の子育てを支援する幅広い活動に携わっている。こうした活動を行うことで、保育園に通う入園児達はも

ちろんのこと、未就園児や卒園児も含めた千代で生まれ育つ子ども達を、長期的に見守ることが可能になっているのである。

3. 千代地区を生かした「地域を知る」保育活動の展開

「しゃくなげの会」では、「千代」という地域を生かした活動に積極的に取り組んでいる。特に、千代保育園では、保育活動のなかに「地域を知る」ことをねらった「食育」や「散歩」を取り入れている。

まず1つめの「食育」は、穀物や野菜、肉、果物に至るまで、さまざまな食材を生産している千代地区の特性を生かした活動となっている。例えば、地域の「棚田保全会」と提携して行う棚田の保全や畑作りは、子ども達に、千代地区で行われている農業を体験する機会を提供している。他にも、月に1回、野菜や肉はもちろんのこと、豆腐やゴマに至るまで千代地区で生産されたものを揃え、地域食材のみで給食を作る「完全地域食材の日」を設けている⁵⁾。そして、この地域食材の日には、食材の生産者を園へと招き、子ども達と一緒に給食を食べることで、生産者と子ども達との間に、顔が見える関係を築いているのである。このように、食材の生産や食の体験を通じた「食育」は、子ども達が自分達の住む千代地区を知る契機となっているのである。

そして、「地域を知る」もう1つの活動が、地域の「散歩」である。千代保育園では、通常の午前や午後の保育のなかで「散歩」に出かけるのはもちろんのこと、年に2回は、お弁当をもって、一日がかりで地域を散策する日を設けている。また、普段の活動のなかでも、保護者の負担にならないよう、給食のご飯でおにぎりを作り、それをもって、午前中から13時頃までかけて、散歩に出かけることもあるという。

これらの「散歩」は、子ども達が自然や地域の人々とふれあい、地域を知る貴重な機会となっている。散歩に同行する保育士は、道すがら、園児の家を紹介したり、生産農家の前を通る場合には「きゅうりのおじちゃんのところだよ」と教えたりしている。これらの経験を通じて、子ども達は徐々に、地域の場所や風景を覚えていくのである。また、松島先生が「子ども達の顔を、地域の人に見てほしいし、地域のお年寄りの顔も見たいし。みんなよろこんで手をふってくださいよね」と語っているように、散歩は、子ども達と地域住民達との自然な交流の機会となっている。実際、散歩の途中で子ども達と会えることを楽しみにしている住民も多く、なかには、家に寄らせてくれる方もいるという。

このように、「食育」や「散歩」は、千代保育園にとって、千代地区を知り、住民との関係を育てる重要な活動となっているのである。

4. ボランティアの参加 地域住民の思いを生かす

「しゃくなげの会」のさまざまな活動は、地域住民のサポートによって支えられている。例えば、保育園に通う孫を迎えに来る保護者に、職員が、保育園のご飯を炊くための薪を分けてもらいたいと頼むと、「俺がトラックで運んで来てやる」と言って、その日のうちにもって来てくれたことがあったという。他にも、畜産農家の方が、畜産で使うわらをもとに、わらぞうり作りを実演し、さらに、作ったわらぞうりを子ども達にプレゼントしてくれている。「ボランティア」という名前はついてはいないものの、住民達は自然な形で、「しゃくなげの会」の活動をサポートしているのである。

しかし、問題もある。現在、千代保育園には、地域の人から「俺達に何かやらしてくれないかね」「手伝いをさせてください」といった声が寄せられているものの、これらの声を十分に生かしていない状況がある。こうした問題を踏まえ、「しゃくなげの会」では、住民一人ひとりの思いや力を生かすためにも、今後、活動を支えるボランティア組織を立ち上げることを計画している。さらに、「しゃくなげの会」は、組織化と同時に、子どもとの関わり方等を学ぶ、ボランティアの養成講座を開きたいという希望も持っている。講座で学ぶことによって、ボランティアをする側もお願いする側も安心できると考えられているためである。調査の事前アンケートで、「今後は職員だけでなく、もっと住民の力を活用し、地域皆で関わる園づくりをしていきたいと願っています。ボランティアの立ち上げとその運営等は、まだ手探り状態です」と回答しているように、住民の力をさらに活用するためにも、ボランティアの組織化は、今後の検討課題となっているようである。

おわりに

これまで見てきたように、千代地区では、住民同士の議論を重ね、行政との交渉を繰り返した上で、社会福祉法人を立ち上げ、保育園の運営に乗り出している。現在のところ、順調に運営は進んでいるが、こうした運営や活動を支えているのは、職員の先生方の、千代の子ども達の育ちや千代地区の住民に対する思いであると考えられる。園長の北澤先生は千代地区の住民の一人として、また、副園長の松島先生は子育てを担う保育園の立場から、子どもの育ちを豊かにすること、また、地域全体の活性化を図ることを考え続けている。実際、「しゃくなげの会」では、過疎化が進みつつある千代地区に、元気な子ども達の声が響き渡り、活気が出ることを願って活動を行っている。先に挙げた「食育」や「散歩」といった千代保育園の活動も、子ども達の育ちを豊かにする活動であると共に、地域全体を活性化させる活動として取り込まれているのである。

2006年12月、筆者がインタビューのために千代保育園を訪れた際、園児達は、初めて出会う我々に対して、ニコニコと手を振って出迎えてくれた。こうした子ども達の人懐っこさこそが、千代地区の人達にあたたかく育てられていることのひとつの証であると思われる。これからも「しゃくなげの会」の活動が、子ども達の笑顔を生み出し、千代地区の活性化を支え続けていくことを願っている。

(丹治 恭子)

<注>

- 1) 特別委員会のメンバーは、民生委員・社会福祉協議会・小学校PTA会長・歴代保育園の保護者会会長・現役保育園の保護者会役員・自治会長・副会長(北澤先生)と、千代地区に関わる各種団体の代表者が集められ、検討が進められた。
- 2) 協定書の項目は、9項目に渡っていた。その項目には、「保育士の派遣」以外にも、土地・建物を市から法人に無償貸与すること、また、園舎等の大規模修理をする際には、行政が修繕費を出すことなどが含まれている。
- 3) 社会福祉法人を設立する際の資金を集めるため、自治会では、地区内外に寄付を呼びかけた。その結果、千代地区から他地域へと移り住んだ親戚や、地区内の公立保育園の職員や市の職員など、150名ほどの人の寄付を得て、法人設立へと至ったのである。

- 4) 「くまさんのおうち」は、施設内外共に、充実した環境が広がっている。会場は、20畳ほどの広さがあり、ワンフロアになっているため、全体に目を配りやすい。屋外には、保育園の保護者が作ってくれた砂場やグラウンドがあり、トイカーで遊ぶこともできる。また、施設の裏には、裏山があり、葉っぱ拾いや山登りなど、体を使った遊びが体験できるようになっている。
- 5) 地域食材を用いた給食は、飯田市全域の保育所で推進はされているが、千代地区ほどの「完全」に地域食材を用いて給食を提供できる場所は少ない。食材の仕入れ先の問題や、季節によって手に入れられる食材が限られることなど、「完全地域食材の日」を実施することには難しい側面もあるが、「しゃくなげの会」では、今後もこの取り組みを続けていきたいと考えているという。ここにも、千代地区に根付いた保育の姿勢が窺えるといえよう。

< 参考資料 >

- ・ 飯田市千代地区自治協議会・社会福祉法人千代しゃくなげの会 2005, 「社会福祉法人 千代しゃくなげの会設立・千代保育園経営移管 記念式典」
- ・ 全国保育団体連絡会・保育研究所編 2003, 『保育白書 2003年版』草土文化
- ・ 「県内初の『住民立』 飯田市から経営移管し存続」MSN毎日インタラクティブ
<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/edu/archive/news/2005/11/02/20051102ddlk20040056000c.html> (2006.12.12)